

「行動障害を有する方への支援について」

Nさんはとても人当たりが良く周りをいつも笑顔にしてくれており、パン販売などでもお客様からの人気を集めている。中には、Nさんの接客目当てでパンを買いに来てくださるお客様もいるほどだ。しかしNさんは知的障害と自閉症を伴い、日常的に強いこだわりが見られ混乱や不安を覚える場面で突発的に人や物に手が出てしまう事が多かった。又、Nさんは月曜日から土曜日の朝までホーム(法人内GH)を利用しており、特に月曜日の朝はご家庭から登所してくる為、強い帰宅願望が見られ不安定な状態になりやすい。その様な状態の時は職員と目が合う・挨拶をされるといった普段であれば何でもないやり取りも刺激となり攻撃的な衝動にスイッチが入ってしまう。

最近では表情や視線等で衝動性が高い状態が感じられるようになり、まずはその状況を職員全体が情報共有し理解する為の話し合いを重ねてきた。以前までは何か問題が起きた後にNさんを注意したり、なだめたりする事が多く他害や物損が頻繁に起きてしまう状況を繰り返していた。Nさんが不安定な時には刺激の少ない空間を作る事・曖昧な返事をしない事等を心掛けてきたが、具体的な場面で言うとNさんが「いつお母さん迎えに来るの?」「昼食まだ?」との様々な質問に対して、「分からない」「ちょっと待ってて」等の分かり辛い返答をしない事により、パニックに繋がる混乱を防ぐようにしている。それでも混乱が予想される際には、相談支援センターYeast(法人内事業所)等、別の建物に移動し刺激の軽減を図る事によって場面の切替えを行っている。

Nさんはホーム行き送迎車両に乗れずに、別の車両へこだわってしまうことも多くあった。以前はなんとか乗ってもらう為にあの手この手を使い、その結果ホームに戻るまでに何時間もかかる事が頻繁に見られた。又、対応する職員によって声の掛け方や誘導の仕方もバラバラでその事が更なる混乱を招いていた。職員同士で話し合った中で、今は同じ場面でも焦らず、急かさず、気分を盛り上げる声掛けをしながら気持ちよく車両に乗り込んでもらえる様に努めている。

Nさんと向き合う日々の中で教えてもらった事は、日常的に起こる様々な問題はNさん自身の中にあるだけではなく、職員の対応が一貫していないという理由により起きている事が多いという事であった。又、月曜から土曜日の朝までの1週間という時間軸の中で、Nさんにとっては“家に帰る”という事が唯一見通しのもてる手がかりとなっている為、1日1日の生活の中でNさん自身が充実した時間を実感し、生き生きとした1週間を組み立てていけるサポートを、今後の支援の中心として考えたい。

もう1つ私達が向き合うべき問題として週末は帰宅するという、現在のホームの運営についてである。この問題を改善していく為には様々な事は上げられるが、ホーム(家)という名前に恥じる事のない無い様、課題としてそれぞれの職員と共にしっかりと受け止めていきたい。

ワークショップ・チボリ
脇坂 亮平